

## 訃 報

### 本田實信先生のご逝去を悼む

新 谷 英 治



京都大学名誉教授であり名古屋商科大学教授としてご活躍中であつた本田實信先生は1999年1月6日急逝された。1923年3月29日のお生まれであるから、今しばらくで76歳をお迎えのはずであつた。ご高齢には違いないが、至ってお元気なご様子とお見受けしていたことから、ご逝去の報はにわかに信じがたいものであつた。

本田先生は、本誌の再刊号である第23号（1984年12月）に、ご自身が最も大切にされている史料である『集史』の内容と完成年代を、ラシード自身の手になる著作目録によって検討した論考「『ラシード全著作目録』について」をお寄せ下さっている。以後も一貫して維持会員としてお力添え下さり、また実務にあたるスタッフを常に励まして下さった。西南アジア研究会と『西南アジア研究』への愛情はひとしおであつた。

先生は東京大学文学部史学科をご卒業後、1953年からケンブリッジ大学でV. Minorskyらに師事してイル・ハン国史の研究を積み、Ph. D. の学位を取得された。1957年北海道大学文学部助教授、1964年には教授に昇任され、東洋史学第二講座を担当された。1975年京都大学文学部におうつりになり、以後、間野英二助教授（現教授）とともに、誕生間もない西南アジア史学講座を育て上げられた。1986年3月定年によりご退任になり、同年4月に名古屋商科大学に着任されて研究と教育に専念されていた。この間、国内の諸学会・研究機関の理事や研究員、運営委員などとして活躍され、諸外国の国際学会にも度々参加されるとともに、第31回国際アジア・北アフリカ人文科学会議（CISHAAN：1983年）の日本開催にあたって尽力されるなど、学問の国際交流にも貢献された。

先生は『イスラム世界の発展』（講談社、1985年）をお書きになるなどイスラム史やイラン史にも造詣の深い研究者であり、関係諸文献の収集・整理にも精力的に取り組まれた。しかし学問的関心の根源はモンゴル史にあり、生涯真摯にモンゴル史に取り組み続けられた。「モンゴル史の研究はまことに興味深い。ひと度その研究に手を着けるや、次から次へと探求心をかき立てられて、限度が見えなくなってしまう。」モンゴル史への思いを『モンゴル時代史研究』（東京大学出版会、1991年）の中でこのように述べられた。先生は言葉の真の意味でMongolistであつた。

先生は『モンゴル時代史研究』の論考23編を振り返って、ご自身の研究志向が次の2点にあるとされた。第1は、「モンゴル・ウルスの国制解明」、わけても「チンギス・ハン創設のモンゴルの原初制度」が、「モンゴル人自身のイスラム化が始まり、イランの伝統的な行政制度を採用するに至って、変容せざるを得なくなり、新しい国家制度の創出」を見るに至った経緯を、「イランのモンゴル政権であるフラグ・ウルスの歴史の中に見定めよう」と

されたこと。第2は、「モンゴル時代のペルシア語史料の吟味」、就中「ラシード・ウッディーンの『集史』に対する史料批判と他の史料との比較」であり、ことに『集史』の研究はこの40年余1日として念頭を離れず、その訳註の完成は私の悲願である。『集史』は読みこめば読むこむ程、私の思索を深め、その吟味に私を駆り立てる」と述べられる。そして、『集史』の編纂自体が、実はフラグ・ウルス史研究の最重要のテーマ」[同書]であり、ふたつの研究志向は相互に重なり交わるのである。『集史』訳註の完成という先生の悲願は、ご生前にはついにかなわなかった。先生がこの世に思いを残されたとすれば、ひとつはこのことに違いない。しかし、生涯をかけて取り組むに値する史料との出会いは歴史研究者冥利に尽きるものであろう。その意味で先生はお幸せであった。

また先生は『モンゴル時代史研究』において日本のモンゴル史研究の動向を次のように整理された。「第1は、中国史の立場からの元という時代の究明である。…第2は、言わばユーラシア史の断代史としてのモンゴル時代史の研究である。…第3は、ユーラシア史全体の中で、モンゴル時代の意義を考えようとするものである。…」先生のモンゴル史研究の基本姿勢は、第2あるいは第3の動向に沿うものであろう。いずれも十分に果たし得ていないと自戒なさっているが、先生の切り拓かれたモンゴル史研究の道はその壮大な構想と揺るぎない実証において他の追隨を許さず、また次代を担うべき優れた後進を育成された。現今、世界史上におけるモンゴル時代の重要性が改めて強調され衆目を集めているのも、その学風に直接触れ薫陶を受けた新しい世代が先生の許から登場したことを別にしては考えられない。

先生は学問に対して厳しく自らを律せられた。ある時先生は、史料の制約から研究が進捗しないと嘆く未熟な弟子に、「史料に文句を言ってはならない」と諭された。常に全身全霊をかけて史料に問いかけ、その語るところをもって学問を構築された先生の、暖かくも厳しいお叱りの言葉であった。しかしひとたび学問の話題を離れると、先生は常に私たちに思いやりに満ちた眼差しを向けられ、そして曇りのない笑顔で話しかけて下さった。先生は二男一女の父であられたが、私たちに向けて下さった眼差しと笑顔はまさしく父のそれであった。

昨秋京都大学で開催された日本オリエント学会第40回大会において、先生は「暗殺者教団」と題してイスマーイル派とその山城について講演をなさった。Mongolistであり、また *Îrân-dûst* —— ご自身について「イランぼけ」と訳された —— である先生にとって、1970年から74年に至る間の3度のイスマーイル派山城址調査はこのほか意味深いに相違ない。イラン各地の山城を拠点にイスラーム世界を恐怖に陥れたイスマーイル派の討滅は、モンゴルの西アジア征服、とりわけイラン征服への強い意思を象徴する出来事と言えよう。山城址は先生のMongolistとしての関心と *Îrân-dûst* としての想いの交点であった。多くの聴衆を前にあれほど楽しそうに話をされる先生を拝見したのは、実は初めてであった。そしてそれは私にとって先生の最後のお姿であった。思えば、何かを予感されてあの時今一度我々の前に立たれたような気がしてならない。

お通夜とご葬儀の両日、京都では雪が舞い、常にもまして厳しい冷え込みであった。その寒気の中を、先生は学問への若々しい情熱をそのままに抱かれて旅立たれた。公私に亙り教え導いていただいたことに深く感謝申し上げ、心からご冥福をお祈りする。

(関西大学文学部)